

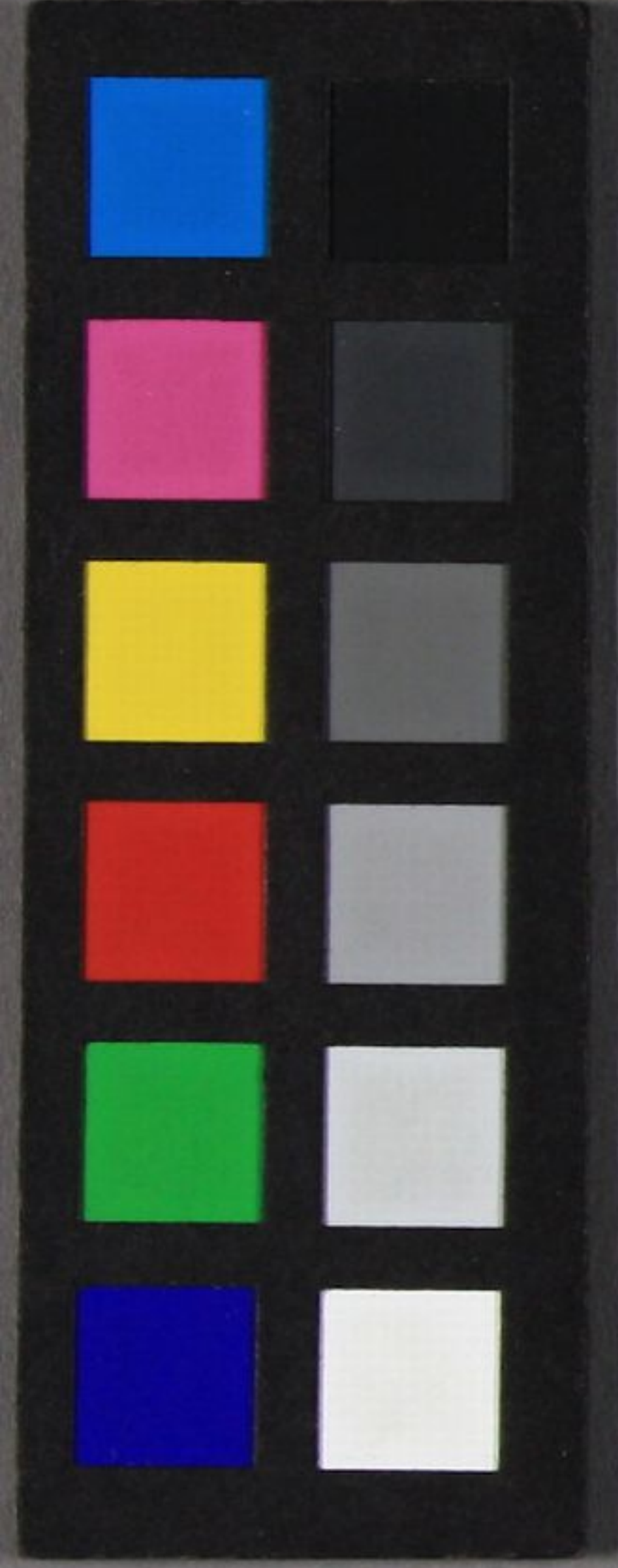
兒玉花外作

詩集

天風魔帆

發兌

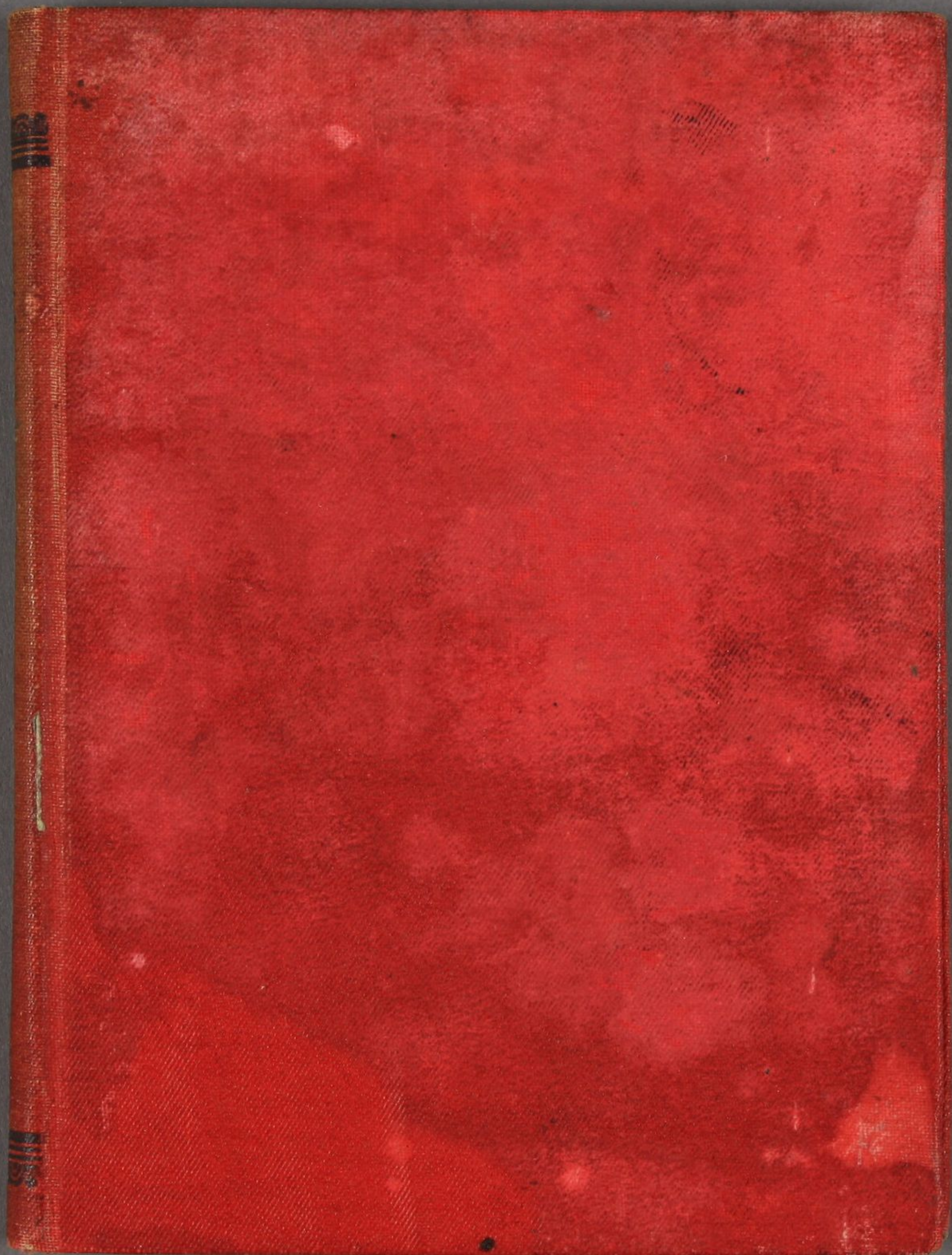
平民書房

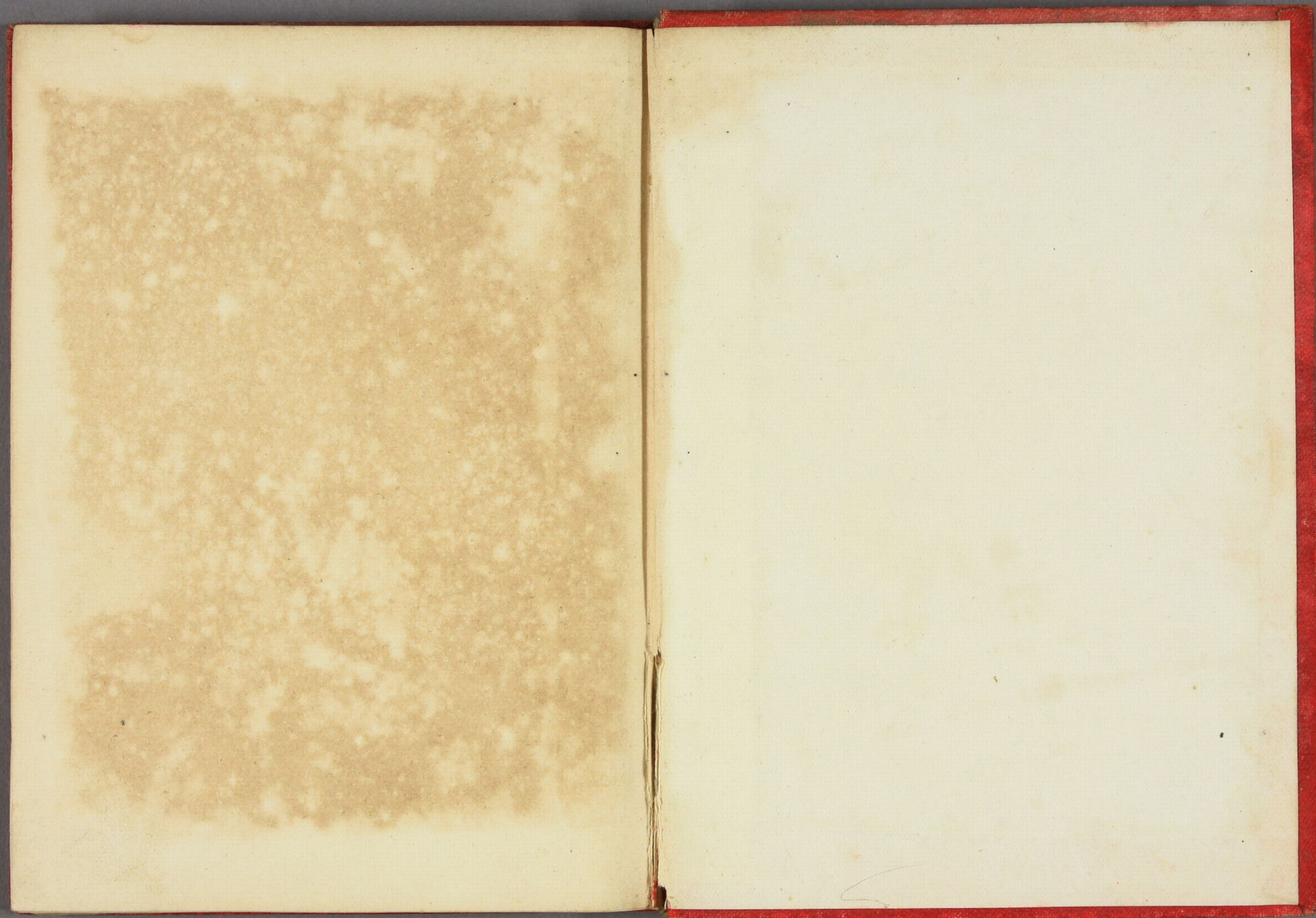


天風魔帆

全

兒玉花外作





兒玉花外作

詩集

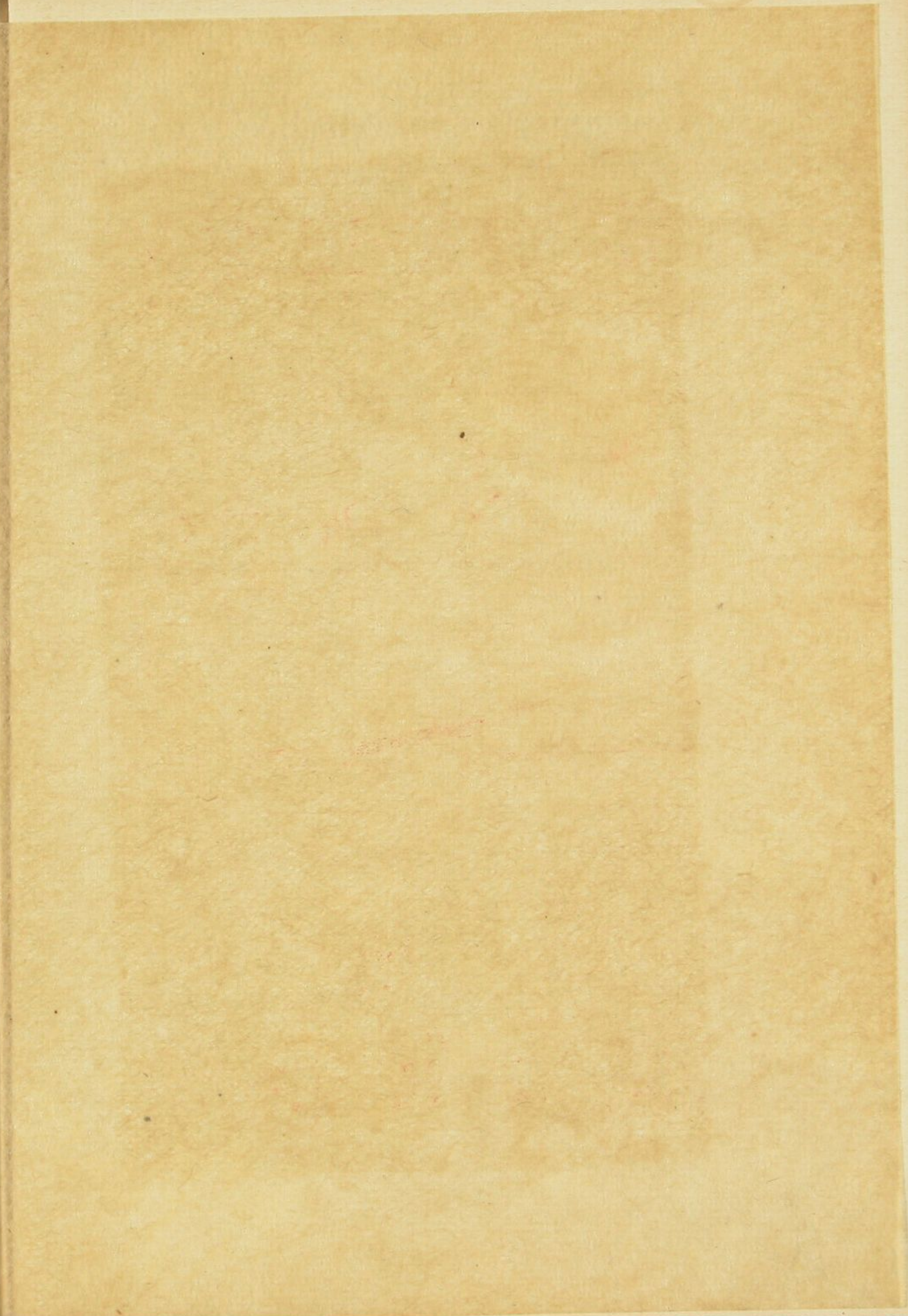
天風魔帆

發兌

平民書房



Faint, illegible text or markings on the right page, possibly bleed-through from the reverse side. The text is very light and difficult to discern against the aged paper.



天風魔帆

目次

| | |
|---------|----|
| 白帆に寄する詩 | 一 |
| 冬空 | 五 |
| 鶯と自由 | 九 |
| 松を刺して | 二一 |
| 世潮 | 二三 |
| 野の少女 | 二七 |

目次

一 五 九 二一 二三 二七

一



木葉の使者

二一

祈禱

二四

柳を植ゑよ

二八

旅に鶉を見てよめる

三二

涙の河

三六

白雲

三八

蟹へのねがひ

四三

本能寺の跡に立ちて

四八

天人

五二

松露

五八

可憐兒

六一

雪女

六四

傷める鷗

六八

ラサールの死顔に

七〇

秋雲

七二

天露

七五

やまど花

七九

死出の湊

八三

苦熱

八五

越中島の朝

八八

感應

九一

遼東の墓

九六

鳥屋の娘

九九

火國

一〇二

新聞幼工の歌

一〇六

仇浪

一一〇

詩魔

一一四

詩と糸

一一七

海に走りて

一二〇

雲甕

一二三

秋思

一二六

詩人塚

一二九

春恨

一三二

海王

一三五

大鹽中齋先生の靈に告ぐる歌

一四二

天風魔帆

兒玉花外作

白帆に寄する詩

あゝ、大波おほなみのうねくや、

旭日あさひを孕はらむ金帆きんぱんは

七月ぐわつ、佐久さくの白百合しらつりの

雲吹くもふく風かぜに揺ゆる如ごとし。

天風覽帆

聞け、赤銅の裸男、
浪も鎮まる火の言、
見よ、巖角に手を舞はし
た、長髪の人立てり。

驚く勿れ、漁夫の子ら、
大き丸帆にわが怒、
小き片帆にわが愁、
載せて駛けれや茫千里。

良王遊長井

いかに其船、釣糸に
鯉、積んでは百石よ、
高き、美しを劍に獲む、
古今ぞ抜ける海賊ぞ。
陸在るきはみ、氷島や
舳の前に崩れ伏し、
魔帆むく影に諸々の

天風覽帆

船は逃るる鱚かな。

巖にたばしる熱血に、

波も躍りて今急に、

行方は知らじ、たゞ勝利、

いざや帆を張れ、

吾が胸のごと。

冬 空

あ、あ、

冷々にけり、——わが胸や、

あ、あ、

乾れにけり、——わが感情。

雲は蔽ひて、光なき

冬空、泣くよ雪ひらら、

愁もよへごわが眸に

熱き雫の溢れ來ず、

人の心の秋寒に

濺ぎて涸れし泪かも。

人のこの世に影ぞ無き

『自由』『理想』を天上の

春に覚めつ御光に

涙流れて、萬斛の

露や盡きしか、憧憬に。

いま、哀の潮落ちて

火の目、黄泡の酒を呼ぶ、

酌めば、つめたき冬の夜も

顔もほ照らぬ恨みかな、

氷のうへに瑠璃の盃

薄き命を碎かむか。

神よ、悪魔よ、右左

(少女の姿、蛇の形)

來れ、詩人に新なる

さかづき満せ、血と涙

世の悲よ、苦よ、毒よ、
 乾坤盛りて吞ましめよ、
 善悪、美醜、泡咲きて
 一つに戀の金の杯、
 男兒、唇接け酔ひぬべく、
 ああ、日の如く軀は焦爛れ
 天も、地ぞ無き渾沌に
 沈みて灰と消むむかな。

鶯と自由

朝日の光、花に照り
 心ときめく明窓に、
 聴くや鶯、梅が枝の
 花の世界に遊びつ、
 春を歌ふを吾れき、ぬ。

月も曇れる此の夜半に

獨り愁ひにさむる時、

『自由』の呻吟ぐ聲を聞く、

嗚呼、衰へて地につくか

死するが如き聲すなり。

薄日の影をうけて

松を刺して

ある日激するところあり
七首を抜いて松を刺す。

松は悲しき聲を上げ

雲にむかひて叫びけり。

たのが甲斐なき身を嘆き

天風寛帆

如物殖す勇士の
歌をうたひて歸りけり。

世潮

牛の野河の

水を飲み、

人は都會の

毒を吸ふ。

隅田のほとり

草のみ座、

天風寛帆

天下清むと

花冠して。

日の輪はめぐり、

紡車、

われ挽回の

大てだれ。

洲なるよし葦

潮満てば、

葉莖ひたく

千雀啼く。

あゝ夕月や

雲を越ね、

瑞穂の國の

一人をも

時世の波瀾

いま胸に、

たちて哀しく

歌ふかな。

野の少女

ほのく明けし小百合野の

夢にた、すむ乙女子の

裾は露にぞ濡る哀れ、

昨夜、小草と添寝して

色やうつりし唇も

青きたもわの優乙女。

白しろき肌はだに世よの塵ちりの

衣ころも被かける貧まづし女めよ、

亂みだれ髪けわけて目めをあぐは

鳥とりにうつ、や翅つばさ影かげ、

朝あしたの清きよき蒼あをぞら空らに

雲くもと消けばやと祈いのるらん。

高たかきは恨うらみ、雲くもよ鳥とり、

脛はよの下もとなるはかな草くさ

土つちにはこりて生いくれそは

なぞ人ひとひとり家いへぞ無なき、

袖そでを嚙かみての悲かなしさの

熱なみだ涙だに草くさの枯かれぬべし。

可かれん憐んや君きみし狂くるふかも、

女をんばかりにきびしかる

世よのならばしを籠かご鳥とりの

羽はねふる如ごとくいきごほり

啼きてや野へは來しか君
 自然の子なる優少女。
 野には人なし、いかで君
 み山に朝日出でぬ間を
 舞へよ、歌へや、さまざまに、
 百合花もゑむべし、蝶まはめ、
 視がふ吾ぞ木の蔭を
 鹿の如くに走り隠れむ。

木葉の使者

晝は日影に咽びつ、
 夜には泣くらむ月かげに、
 谿の岩間をいでしより
 花にも哭きし野の川の
 流れを下る一葉舟、
 末は海かや——水の墓。

岸に佇ずみ、うち嘆く
わが悲哀を載せよかし、
人の心の戸やかたく
神の胸さへ鎖されぬ、
天と地とに海のほか
愁思送らむよしあらじ。

歡樂去んぬ枯し葉よ
げにふさはしの吾が使者、

永遠にかへらぬ海の門に
やさしの波の主とは、
ふるへつそれと答へよや、
頬青白き人の子と。

祈 禱

昔賢き豫言者が
 口吻まぬは恥あれど、
 愚狂吾にも嘆かるる
 腐敗、悲惨の世のさまや、
 そこに道義の光消ね
 あはれ人情の花あらず、
 浮世の風ぞ腥さく

黒闇々の地獄かな。

神の怒のあらばいざ、
 天より墜せ断頭斧
 搖ぎ閃めき地の上に
 人をぞ刈れや草の如、
 罪こそ憎め、大神よ
 火花の弾を彗星の
 飛ぶが如くに投げよかし、

苦界碎けや、救ひなり。

いづれの政府、強國か

人の力のいかにして

神の肘をば制しねん、

天のわざをやあげつらふ。

嗚呼、秋鳥の歌にさへ

木葉は落つれ梢より、

吾のこの歌よわくとも

天の感應のなかるべき。

柳を植ゑよ

柳やなぎを植うゑよ

天下てんかの大道だいたう

緑みどりの雲くもの

地ちに曳ひく如ごとく。

牛馬うしうまさあれ、

利害りがいに走はる――

市いちの子この衣き

百苦ひやくくに息いきふ。

春はるや黄きにもわ――

垂たれたる絲いとは

天地あつち結むすび

太平たいへいの影かげ。

雨風あめかぜなよび

濡れ立つ情姿、

柳絮飛んでは

満都の雪よ。

柳を植ゑよ

天下の坦道、

琴を枝懸け

歌ぞたゞよふ。

櫻は男、

柳は女、

二つ合せて

大和の花木。

旅に鶉を見てよめる

尾花は高く秀でつ、
岸に續ける枯蘆を
揺りて流る、大河や、
水にも似たる旅人の
吾は夕陽に佇みぬ。

遊子感慨に溢れつ、

聲に耳たて眺むれば、
汗と疲れの田の跡に
刈りし少女の影もなく
落穂を拾ふ鶉の群。

黄に青黒く美はしき
羽もつ君よ譬ふれば、
國より國と渡り行く
樂師の組に似たるかな、

幸ある方へ歌ひつゝ。

踊るか、沈むわが心、

荒みし胸をみすてつ、

往かんや、鳥と吾魂よ、

さらば別れむ永遠に

再び還ることなかれ。

緑、去りたる草のごと

われは休れむ、安息の

故郷ごともあらぬ身ぞ、

鳥に恵みの神あらば

導きたまへ、わが霊も。

涙の河

秋の愁に堪へかねて
 ふりさけ見れば、大空に
 今宵か、れる雲もなく、
 銀河流れて明かに
 天の不滅の螢火か、
 光あふるるあまの川。

ああ、人の世の秋は常、
 み空に星の川あらば
 地にぞ涙の河あらむ、
 水嵩や代々に増すことも
 人の目つねに露ありて、
 見れどもそれとわかぬのみ。

白雲

(坪内孤景子を弔ふ歌)

國も愁へよ、人も泣け、

恨は長く草深き

大石橋の戦ひに、

少壯士官わが友の

命は敵弾に碎けたり。

遼東の野に砲煙たち、

詩神の裳に筆捨て、

國の賜びたる劍を把り

火踏み、血を越え、敵を追ひ、

御國の爲に殞れけり。

波も激して日の本に

悲しき報知齋ちし時、

嘆きに吾や泣き伏しぬ、

神も運命も無情なる

天をば地も呪ひにき。

今宵は月の青白う

一片光る西の雲、

故國の空へ君が魂

雲に乗りてぞ慕ひ來し、

遺骨の郷にかへるまで。

三歳、早稻田の學窓に

詩筆研きし一秀才

劍は残りて人むなし、

花咲き鳥の謠ふとて

いつか聞かんや君が歌。

悲しき風に翼して

高きに消ゆる白雲よ、

やよ待て淋し。わが靈も

共に抱いゆけ、涙なく――

春はるや霽はれたる天あまつ國くに。

蜚ひへのねがひ

礁いは陰かげきよき蜚あま少女をこめ、

青あを淵ぶち、波なみに沈しづむ間まを

旅たびゆく吾われと語かたらずや、

むれて歌うたへる白はく鳥てうの

首くび向むく如ごとくをこめらよ。

つぶらの眼まなこに何なに怪あやむ、

生いくにに堪たへぬ熱情ねつじやうの
燃もゆる炎ほのほの身みを、君きみよ、
思おもひなきさの鳥とりとなり
沈しづみて胸むねぞ冷ひやさなむ。

人ひとの情こころのさだめなや、
浪風なみかぜあらし世よの海うみに
流ながれ漂たふふそれよりか、
只ただ採かる業わざにたちまじり

賤しづが安やすきを得ねなましを。

わが戀こひ、空そらの雲くも少女せうじゆ
浦うらをさまよふ風かぜの子こも、
散ちりてかつ咲さく波なみの花はな
ながめ歌うたひて樂たのまん、
白浪しらなみ、白髮しらがかつぐまで。

世よ捨て、馴なれにし塵衣ちりころも

海人のみけしと脱ぎかへむ、
眞珠こそ包めわが袖に
愁秘むべき、鹽濡づも
袂に涙しぼるかは。

やよ蟹少女、あはれまば
た、折れ蘆の柔態せね、
花ぞ凋みしわが魂に
男女をいはであれ。

君し黒髪長さばかりぞ。

本能寺の跡に立ちて

空は曇りて雨模様、

くもりがちなる胸擁き

われ弔ひぬ、本能寺、

此處や昔に信長と

彼の光秀の戦ひし

夢の跡かや、劍の影

炎もあらず、矢叫びも、

たゞ淋しげに雨ぞ降る。

壕はあらねど、光秀が

深き恨は幾尺ぞ、

梅雨冒して丹波路や

越えきし群を神や堰く、

稠座の中に罵しられ

眉間の血汐忍びむや、

世に逆賊とうたはるも

吾れ光秀に情を寄す。

頭回せば、この社會

あ、信長や光秀や

さても似る人いま多し、

弱きは何の罪かある

花にもあらず地に踏まれ

血潮の河は流れたり、

起てよ、起たすや、起たざらば

嗚呼、千歳に恥辱あらん。

天人

光の潮ひかりうしほ

雲の濤ぞくもなみ

無窮に注ぎむきうそ

音もあらずねも

高き天人たかてんじん

雲を踏みてくもをふみ

雪の裳ゆきま

踵見わすかかとみ

日も夜も憧れひよこが

まなこ痛みいた

無邊の土むへんつち

涙流るなみだなが

櫻、青葉さくらあなば

秋ぞもみぢ—

雲の紅緑

四時廻る。

または顔白

長き髪の、

千人集めば

雲の如き。

あはれ、この雲

泥に似たり、

吾や掬ばむ

天の紫瑞。

双手舉ぐれど

露も墜ちず、

熱き瘦頬

嵐吹けり。

あらくゆる翼つばさ

呪のろひ呼よべど、

雲くもへ到いたらじ

恨うらみ言葉ことば。

奈落ならくの海うみよ

炎吐ほのほはいて、

重おもき肉體にくたい

蠟ろうと溶とかせ。

されば、日ひにこそ、

月つきの姿すがた、

雲くもに永劫やうがう

空そらを渡わたる。

松露

紀伊は美^よき國^{くに}、白浪^{しらなみ}の
岸^{きしう}打^たつ音^ねと、巡禮^{じゆんれい}の
鉦^{かね}の響^{ひびき}を聞^きくこかや、
和歌^{わか}の浦^{うら}わにほご近^{ちか}き
その名^なもしるき紀見井寺^{きみいでら}。

寺^{てら}に通^{かよ}ひ路^ぢ松原^{まつばら}や、

世^よは火^ひの道^{みち}か、昔^{むかし}より
こ、よ涙^{なみだ}の道^{みち}ならむ、
哀歌^{あいかぎん}吟^{ぎん}じて吾^{わが}が行^いけば、
泪^{なみだ}は落^たちてかぎりなし。

籠^{かご}と、熊手^{くまで}を、肩^{かた}に載^のせ
歸^{かへ}る少女^{せうにょ}よ、露^{つゆ}踏^ふみて
明曉^{あす}はよぎらば、わが涙^{なみだ}—
晶^{きよ}き松露^{しょうろ}と化^{かは}りつつ

幸さいらをぞ見出みでん——數知かずしれず。

可憐兒

春はるの水みづゆく川岸かはぎしの
淺緑あさなごりなる柳やなぎかげ、
哀あはれ母子ぼごの乞食かたみあり、
玉たまとめづらむ嬰兒みどりこを
襤褸つれに被たはふ石いしの上うへ。

げに初花はつはなのそが如ごとく

あな愛らしの稚子かな、
綾や錦に包まらば、
世の名門の捨子かと
人や拾はむ、立寄りて。

このよの苦をばしるしたる
母のたもわに似もつかで
いと美はし子の顔も、
日々につれなき世の爲に

天をも怨む目とならむ。

衣は雪と墨にせよ
人に差異のあるべしや、
社会主義者の父と稱ぶ
カール、マルクスの名によりて
吾は抱かなむ、可憐兒よ。

雪女

誰が戯れにや小さき雪人形を作りて
道に捨てありしを

春の月下の雪女、

光り給ふが便なさに、

明かしませよとわが庭へ、

梅の傘して立たし、を、

ああ死にましぬ、此の朝け。

胸の思を春の夜の、

風にいはせてかすかにも、

戸をしうちしか、夢うつつ、

さこそは(罪のいと深き)

泣きにけらしな雪女。

魂は涙の露にぬれ、

われは情の子にあれど、

人なるあだの身の熱に

わりなう脆き君なるを、
いたいけ淨き君なるを。

宵に見しま、雪女、

その名の如もうせにしよ、

美し姿ぞとゞめんに、

縁の赤絲の世になうて、

ああ雪姫は消わてけり。

しかな心よ、哀しみを、
土なる人に死こそあれ、
もと形なき雪女、
曉の光に久方の、
天の界へはいにしなり。

傷める鷗

ふるさと捨てし旅人の、
海を渡るにふさはしき、
雲さだめなき大空や、
船を待つまを岸に立ち、
永遠の世の岸望みつつ、
思ひ遙かに眺むれば。

翅裂けたる白鷗の、
濤と嵐をあざけりて、
自由を歌ひ舞へるかな。
陸に心を破りつつ、
海へ遁るる落人の、
顔こそ掩へ、わが袖に。

ラサールの死顔に

眠れよ、父よ、安らかに、
 涙ぞまじる平民の聲、
 雪の白布に蔽はれて。
 國を愛し、ますらをは
 花の少女の戀に果つ、
 ああ死顔の美しき。

栗鼠と自由の棲むところ
 今も獨逸の森の寺、
 眼は星よ、口は鐘
 「吾れ若し死せばいで同志よ
 枯骨の中より起てよかし」
 雲より濤に響くなり。

秋雲

藍の大甕さかしまに、

空ゆ浮へる白雲あはれ、

北に、南に行方しらなく、

雁の一連——断れしに似れど、

天ぞ帶しぬ、無窮の鎖。

花の香しのぶ、乾泥の世、

若き血燃ゆる日本の子、

いま、雲望み感動かすや、

金風清ら劍觸れ鳴るを、

高きに登り衣振り歌へ。

色彩、虹は天女の夢や、

果敢なのならひ、あの秋雲——

夕、白露——萬里の山葉。

人し舒べたる理想の絲ぞ

天風宛帆

永劫こはに消きわじよ、世界よこそ蓋たほふれ。

七四

天 露

(天満の街に佇ちて)

昔むかしは蘆あしの花散はなりし、

今は塵舞ちりまふ大阪おほさかの

天満てんまのまちの夕ゆふまぐれ、

人ひとや車くるまや、星ほしの世よに

響ひびき何なにぞと感かんずらむ。

想おもふ、天保てんぽう饑饉きん歳ざい、

天風宛帆

七五

彼の大鹽が孤憤して

驕れる萬家焼きにしが、

さても其の火にいやまさる

いま烈しさの、熱き世や。

洗心洞にあらなくに、

墓の底をし君出なば

かはる浮世に驚かむ、

争ふまちに、火にあらで

涙の露や濺ぐらむ。

嗚呼、苦める民のため

義人あるなし一人だに、

淀の河水ひんがしに

よしや流るも大鹽が

再び來り嘆かんや。

土にどかへる果敢なさの

人の涙の雨よりも、
神よ、降らせよ天の露
慈悲の眼の一雫、
熱き世界のあゝ上に。

やまこ花

(支那少女に)

春の日紅く
空に溶け、
碧油湛ふる
江戸河や。

岸を髪垂れ
支那少女、

やまごの衣袴よそひ

紙繪傘かみゑがさ

老國くにの歩みあゆの

履遅くつ木そき、

花はなの石あめなか中

なやましげ。

長安ちやうあんの大道みち

今いまし櫻さくらに

青柳あをやなぎ

感かんそゞや。

國土こくさじやう情じやうあり

旅たびの人ひと、

花くわ木ほく涙なみだを

濺そぐべし、

天風窺帆

君きみに一ひとねだ枝

折をれ翳かざせ、

大和女やまとをみなと

戯ざれ呼よばむ。

死出の湊

佇たすむ市いちの西にしの空そら、

海うみの潮雲望しほぐものぞむとき、

あこがれをわがこころごる吾心、

浮うかぶ白帆しらほに身みをのせて、

はてなき海うみの波なみわけて、

獨ひこり去さらむと思おもふかな。

天風窺帆

塵の牢囚の軀を嘆き、
頭をあげて目を閉せば、
衢や、雲や、海きわて、
遙に遠くなほ遠く、
天つみ國の見ゆるかな、
死出の湊は静かにて――。

苦 熱

東の山を薔薇の華、――
西の山のは火の衣、――
天の王子の急性に、
大日輪のくるめきや。
われ南風に翔けのぼり、
黄なる軌道を跨にして、
永劫の金鎖ぞ手に断たむ。

地のうへ草木、葉は緑、
 花は紅また白に、
 光の恵、美しくも、
 人し情ぞすさびては、
 罪の熟果のたゞ黒し、
 日よ、そは照す甲斐ありや、
 冥獄の爐の炎を懸くべけれ。

雲なす心、夜を戀ひ、
 涙に月よちぎりしも、
 今し乾きて火の眼、
 苦熱の日をば見る堪へじ、
 天なるなやみ、地のもだね—
 溶けて火柱、虹の如、
 此の世の外に
 燃わつ消えなん。

越中島の朝

(失業者の自殺)

鬼こそ堪へめ、人なるを、
 長き苦しき労働に、
 身は青草の細くのみ、
 一たび肺を病みしより、
 血を咯き逐はる杜鵑、
 彼方此方とさまよひて、
 今はすみかもあら悲し、

血に啼き狂ふばかりなり。

兩國橋の欄干に、
 流るる水をながめしが、
 夜の鷗の侶となり、
 哀れや水に沈みけり。
 越中島の蘆の邊に、
 死骸は浮きぬ、そのあした、
 嗟吁、惨はしや聞くさへに、

これぞ勞働く人の果。

感應

火の身ぞ登る夕陽の丘、

わが秋髪を掴みつ抜けば、

松葉とはらら、遠雲うごく。

紅き涙の頬よ染むるに、

雨は飛び來ぬ、——袖をも濡れど。

愁に堪へず、青草の如く、

古木、抱いて哀歌誦ふや、
 樹髓悲みたち顛へ、
 小鳥、糸づた、鳴りも止まず、
 天の琴揺れ、嵐吹くなり。

見よや、擴ぐる雲の翼、
 を暗き胸ゆ生れも伸びし—
 闇こそ蔽へ市の瓦、
 涙、恨の雨の夜長がし。

雪

狂ふ血潮の火となりて、
 あ、吾胸の苦しさを、
 彼の雪白き山の嶺、
 罪に汚るる塵の身を、
 雪底深く埋めてむ。

智慧と力に誇るてふ

人にしあれど雪分くる
鹿や兔の技なきに、
遙けく山に對ひては、
浄土踏みぬ嘆あり。

寒き瓦に、優しげに、
吾を見下す白鳩よ、
雪にもまがふ汝が翼、
やよや、翔けれよ、かの山へ、

雪をぞとりてわが頭――
熱き頭に灑落げ白鳩。

遼東の墓

ああ、雲血なり、滿洲の野、
 砲火、東に西に沈みて
 いま、雪鳥の舞ひつ戦ふ。
 日本、露國、劍拔き起ちし
 軍兵十萬、花の黃白
 秋も亂れつ、冬も散りどく、
 屍、石と凍るか百里。

國荒されて悵歌もあらず、
 北風凜々、劍氣を含み、
 氷に爛と野犬の紅舌の
 牡丹大肉、群呼ぶところ、
 仇と敵との骨は八絡——
 『造化』の手なる物體ぞ一に、
 運命の繩目朽ちて土塊。

榮譽、銃擔ひ、祖國の空へ
 歸休す兵士、あ、君雪に
 戦友は白髪、野に死す俣べ、
 歡喜——爐の火、涙に消ねん。
 さあれ、平和は日露の天地、
 陸の春風、島邊の波に
 思情ぞ寄せね——遼東の墓。

鳥屋の娘

自由の里の戀しさに、
 悲しき歌にことよせて、
 ゆるしを得んと「運命」の
 前に琴ひく籠の鳥。

ある日、乙女の花の影、
 歌をば楚々と聴き居たり、

火 國

我われは火國くわこくの

男をとこなり、

君きみや火國くわこくの

女をんななり。

ああ美うつくはしき

日ひの本もとの、

天あまと地つちにぞ

感謝かんしゃせむ。

胸むねに情炎じやうえん

燃もわて蠟ろう、

石いしの離さかりて

在ある堪たへじ

白しろき腕かひなを

環わに捲まいて、

鹿かの子この如ごとく

蝶てふのごと。

裳すそは花野はなのの

露つゆに濡ぬれ、

目めには彩あやなる

雲くも望のぞむ。

行方ゆくへな問とひそ

黒髪くろかみの、

君きみよ長ながくも

春はるをいかに。

新聞幼工の歌

浮世うきよのさま様を人の手に
 集めて組みあつてうつつしては
 人に見みすなる新聞社、
 日々ひびにかはるは理世うらや
 人も機械きかいも忙いそしけれ。
 塵ちりと鉛なまりの工場こうぢやうに、

組みくみし活字くわつじをくづしつづ
 朝あさに勤勉いそしむ小童わらべあり、
 仕事しごとを問とへば『解版かいはん』と
 答こたへやすらむ、振り向むかきて。

人の心こころと、世よはいつも
 労働はたらく兒等こらに寒さむけれど、
 冬ふゆは活字くわつじの冷つめたさに
 凍こほる指頭ゆびさき赤あかからで

インキに染みて眞黒なり。

顔に墨をば塗られては

笑ひもすれど、過失てば

鐵の拳のあら痛たや、

泣けば、字拾ふ文撰や

植字の聲に消れてゆく。

ここも浮世か、そが中に

別くる活字の文字よりも

早く憂世の憂の字を

知りて兒童ぞいと狭き

學びの枝に習ふなり。

仇浪

(法界節の女に)

柳の絮は誰が家の

瓦に雪よ西東

風に吹かれて足拍子

謠ひて來にし旅女

清しき音もしめやかに。

君は千人の花妻ぞ

君は百家の華賓ぞ

腕に抱く愛琴を

撫でつ、歌ふに、目ざまして

泣いてくれるは糸ばかり。

柱に繋る髪、縁

眉ふり身ふる鶯は

千戸萬戸のまめ女房

編笠覗く燕は

樂たのしき夢ゆめの小娘こむすめよ。

玉たまの肌はだへをさぐられて

心こころの海うみの騒さわぐらむ、

枕まくら、藻床もごしもぬれくくに、

白しろき首うなじは水鳥みづとりの

さみ仇浪あだなみに浮うき沈しづみ。

なに世よは笑わらへ一枚ひとひらの

紙かみよ歌うたひて破やぶれずば、
月つきの小琴をこも地ちに碎くだけ、
袂たもとはたいて雲くもの如ごとし
飛とんで行ゆけかし月世界げつせかい。

詩 魔

ほととぎす、

櫳かしの樞くるま戸

摧くだきつ出づれば、

星ほし、森閑しんかんと、

闇やみばかり。

劍けんのこゑ、

卯うの花垣はながきね根

分わりけ瓜つまた立たてば、

眉まゆの三み日かづき月

雲くもを斬きる。

人ひとのこゑ、

廻めぐりて春つきや舎

美よき妹いもは居ゐず、

柳やなぎの濡ぬれて

露の髪。

詩魔のわざ、

戀か狂か

心に問へば、

地籟、天籟

我も無し。

詩と糸

櫻はな散る

墨田川、

岸の草座し

物思ふ。

水は波だち

流るれど、

世をし謀るの
策成らず。

水の上より

禽の羽か、

工女の哀歌の

響くなり。

紡ぎて白き

糸生れど、

胸に血に編む

詩はみだれて。

海に走りて

心は金箭、脚は雲、
 風に走り來、海の岸、
 夕陽は沖に沈みたり、
 巖叩いて悲歌すれば
 大和島根も環に揺れぬ。

ああ、世を棄てし、血を捨てし、

涙掌に盈ち熱情を
 神にふりさけ灑ぐいま、
 海なる空へ虹なして
 驚きて散る寒千鳥。

髪も亂る、藻もみだれ、
 怒る男波や、泣く女波
 玉吐きのぼる吾胸へ、
 小石、小貝のたゞ濡れて

捲きては返し返り捲く

浪よ黙しね、トリトンの
笛は万古の響なし、
去りて巨舟の腹を撃て！
わが血、わが歌、東海の
島をし洗ふ秋と知らずや、

雲 甕

宵の稻妻、—— わが思
天の大甕打ち割れて、
雪噴く雲の一すぢは
南へ流れ血に似たり、
東、夏日はの照るや。

ああ死ぞ知らぬ天人の、

淨き血汐かこれやこの
雲の一杯啜らまし、
胸は爛るも春の野の
花燃ゆばかりたもしろき。

理想の小壺いづこぞや、
天に秘さば抱きても
其の白熱の一雫、
舌は焼とも波頭

激しき歌ぞ汗ゆるべき。

さあれ、萬古の雲の瓶、
仰ぐほのく空の人、
下に可憐しき朝顔の
紅、紫に蓋の
露を盛りてぞ匂ふなり。

秋 思

(遙に大鹽先生の墓に)

浪華なみはの市いちはよしあしの

道頓堀だうとんぼりの繪看板ゑかんばん、

新町橋しんまちばしの青柳あややなぎ、

戀こふは艶人えんにん、われはまた

成正寺じやうしやうじなる暗くらき墓はか。

そも雨あめの晝ひる、雪ゆきの夜よる、

思おもふは高たかき石いし碑ひょう、

わが足跡あしあとの消きねにしも、

海鳥岩うみどりいはを蔽たほふ如ごとく

こ、ろは通かよへ西にし百ひゃく里り。

淀よどの河水かはみづにしにゆき、

雲くもは南みなみには北きたに、

自然しぜんは花はなも變かはらねど、

洗心洞せんしんどうを大鹽おほしほが

いつ義ぎに燃もわて出いでんやは。

あ、山やま青あをく、野のは廣ひろし、

いづこか骨ほねの捨すてどころ

我われも小ちいさき墓はかとなり、

日本やまとの國くににたゞ二ふたつ

君きみが後しりへに唄うたはれむ。

詩人塚

ゆふ日ひ花はなさく

死しの丘をか、

古塚ふるづか一ひとつ

淋さみしき、

血ちに『人間にんげん』と

指書ゆびがく、

胸むねはほのめき

美男よろしを

振ふよ長しふるなが

蔦髪つたがみ

相見あひみて立たちつかつ泣なく。

昔思むかしをもへば

秋風あきかぜ

石いしの口くちにも

熱ねつの語ご、――

國くにの運命うんめい

人ひとの生よ、

市いちを笑わらひぬ

からく、

雲くもは残のこの

詩うた卷まき

舞まひつかへるも、天あめより。

春恨

(水死の女工をうたへる)

雲の輦くも くるまは

西にしまた南みなみ

春戀はるこひ、歌うたに

徜徉さすらひすれば、

あれ、美人よろしめや

浪なみに赤裳あかもと、

墨田すみだの堤つゝみ

袖垣そでがきぞめく、

とみる藻髪もがみに

花はなびら簪かんざし、

感情こころを染めざる

空むなし陶物すゑもの。

沈しづむ哀女かなしめ、

鷗かりめは見しや、

曉あけの鐘かねにも、

夕の唄に、

紡績ぐ糸より

短き命、

水に工みし

女なりしか、

生れは草家、

中は都に、

果は泣きつつ

海の宮居へ——。

海王

行手、穗青の海原や、

あ、情縁の糸たちぬ、

袖に悲しき風の音、

月の亂雲、秋雁も

斬りて走るに似るやわれ。

緑の丘よいざさらば、

聲ぞ一つに海の鳥
新の天は開けたり、
わが舟たつる大吹雪
肩に力の火の翼

出でよ海靈、伏せよ巖、
そに『人間』と刻みなば
濤は嘲みつ碎くかも、
出でよ海魔、髪も濡れ、

女と絞りぬ昨日こそ。

波上家ありほのぼのと、
蒼きは戀し父の顔、
白きは戀し母の面、
生肌躍るももかすの
わが同胞ぞうるはしき。

湛ふ瑠璃酒の巨甕や、

ここぞ古郷、酔ひぬべく
 花も摘むべく波の路、
 白銀の宮、劍の森、
 幻彩の蜃氣樓。

霞隠れに白帆して
 駛るは強き海賊か、
 寶珠はありや、富ありや、
 美女載すも、我の前

息ある影ぞゆるしねじ。

海をぞ裂きし血に染むる
 千丈の藻はいづこにか、
 いで荒潮のただ中に
 捲れむ藻にし火の男、
 燃ゆるがゆかり草と人。

めぐる死海の冬の夜に、

霜の舟べり腕かけて
 廣き死胸にひと雫、
 魚は愁の目をひらけ
 振るや尾鱗に星散らふ。

漂浪の兒の熱情の
 虹を萬里に懸くる時、
 氷の山は崩るかな、
 千年の恨解けぬべく

流るも元の春の水。

かの天上を壓へさて、
 わづかに聖き海の王、
 望むに、陸よ、人よ、塵、
 ああ我れ勝てり、終焉は
 輓歌うれしき濤の音。

大鹽中齋先生の

靈に告ぐる歌

明治廿六年四月六日大坂中之島公會堂に於て開きたる日本最初の社會主義者大會にて朗吟したるもの

時維^{ときこ}天保^{てんぽう}八年^{ねん}の

春^{はる}は二月^{ふりつ}の十九日^{じちゅう}、

中齋^{ちゆうさい}先生^{せんせい}大鹽^{おほしほ}が、

闇^{やみ}の秕政^{ひせい}を憤^{いきん}り

民^{たみ}の困苦^{こんく}を救^{すく}はむと、

洗心洞^{せんしんどう}に燃^もわ立ちし

勇壯^{ゆうさう}義舉^{ぎぎよ}の紀念^{きねん}日^びぞ。

天^{あめ}なる聖^{きよ}き靈^{れい}の火^ひか、

地獄^{ぢごく}の底^{そこ}の罰^{ばつ}の火^ひか、

社^や會^{はう}の腸^{わた}を火^ひにかけて

いざや腐敗^{ふはい}をどごめむと

血性^{けつせい}男子^{だんじ}大鹽^{おほしほ}が

至誠一念火を放けて
鬼神感哭せしその日なり。

春なほ寒き朝風に

『救民』の旗翻へし

五百の男兒堂々と

賄賂貪ぼる有司等や、

餓ゑたる民に情なき

富者の酣睡さまさんと、

鳴らす大砲、叫び聲。

聞けや、暴吏等、富豪よ、

涙もあらず血もなくば、

無觸無感の死屍と

汝の身をば焼きやらむ、

慾や深くば灰の山、

黄光ほしくば火ぞやらむ、

轟く大砲、見よ焦土。

嗚呼、燃わし火や、銃の音、
 夫れも昔の夢と消れ、
 今は人謂ふ文明の
 世とはかはりし大都會、
 砲の音より烈しきは
 車の響、人々の
 競ひ争ふ修羅の火や。

黄金は照らす政治界、
 地主、資本家跋扈して
 社會の蔭に民ぞ泣く、
 哀れ今の世君あらば
 悲憤三斗の血を吐かむ、
 嗚呼、金權は地に勝ちて
 正義、自由は死せんとなす。

陽春、花は開けども

社會の底は冬にして

降り積む雪に壓せられ

憐れ民草薊わいせず、

無殘蓄の美はしき

貧家の少女金ゆゑに

操の花ぞ破らるる。

同じ島根に住みながら

人と人どが殘害す、

皇天何ぞ無情なる

天保の世のそれならで

いま東奥に饑饉あり、

嗟吁此時に君あらば

怒りて天も地も焚かむ。

今歲三十六年の

春も四月の六日の夜、

墓場に君を起さむと

君を演壇より呼ぶならじ、
枯骨は死より甦らむや、
再び君を火の中に
惨死さするに忍びむや。

西に東に漂泊ひて

よしあし知らぬ浪華なる

我れ大坂に來し夕、

入日の雲を見てしより

ただやかならぬ我胸や、
夕焼雲を仰ぐたび
胸はもねては君慕ふ。

爪先立てて眺むれば
君が焼きたる難波橋、
天満は彼方、公會堂
吾等同志が世に慨し
聲を擧ぐるの社會主義、

怨恨盡さざる君が靈
この夜この會、來りたすけよ。

天風魔帆終

明治卅九年十二月二十八日印刷
明治四十年一月一日發行

定價金參拾五錢

郵稅四錢

著作者 兒玉花外

發行人 熊谷千代三郎
東京市本郷區弓町一丁目二十六番地

印刷人 岡千代彦
東京市芝區新櫻田町十九番地

印刷所 自由活版所
東京市芝區新櫻田町十九番地

不許複製

發行所

東京市本郷區弓町一丁目二十六番地

平民書房

